

「やっと取れた！」

初の“九州”というタイトル

雨の玉名をパワーで制する

通算イーブンパー 144

29歳の空 真一郎（門司）



気合がほとばしった。終日の雨の中も空はレインウェアを身に着けることなく、1番のスタートから最終18番をホールアウトするまで半袖で通した。正午の気温が20度前後と少し肌寒かったものの、11月に30歳を迎える若い空には、どうってことなかった。「雨は苦手ではありません。高校、大学でかなり

雨の中で（試合を）やりましたから。雨でみんな崩れると思い、耐えて耐えて、丁寧に丁寧に、と頑張ってやりました」。1番でボギースタートも、3番3メートル、5番4メートルのバーディーパットを決めてリズムをつかむ。アウトは2バーディー、2ボギーの36。インは1バーディー、2ボギーの37と雨を苦にせず、スコアをまとめた。天気の良い日のドライバーの飛距離は290～300ヤード。身長183センチ、体重88キロと迫力満点。雨でランが出ないと言っても、他の選手を圧倒するパワーでコースをねじ伏せ、プラス慎重なゴルフで「九州」のついたタイトルを初めて手にした。

去年は苦い思いをさせられた。初日71をマークして首位に1打差でスタート。最終日は前半終了の時点でトップに並んでいたが、終盤に崩れて79。結局、6位タイで終えた。「去年のリベンジができました。優勝は嬉しいですね。やっと取れました」との言葉に実感がこもる。



北九州市門司区の生まれでゴルフは小学5年から始める。長崎日大高一専修大で腕を磨いたが、プロを目指したのは高校1年まで。高校2年の時、空は長崎県の国体メンバーに選出されたのだが、その時のチームの監督が前九州ゴルフ連盟競技委員長の塚根卓弥氏。「塚根さんと出会ってからですね、考え方が変わったのは。社会的な話なんかもしてくれて。仕事をしながらでもゴルフはできる、と。随分かわいがってもらいました」。今、空はゴルフにも仕事にも真っ向勝負だが、ウエートは仕事。大事なビジネスがあれば、大会中であっても欠場するという。

昨年9月、空は28歳で大正13年開業、曳船・通船業の「春風海運」（北九州市門司区）の4代目社長に就任した。社長業が忙しく、年間ラウンド数は約30回。競技に出場する選手の中では屈指の少なさだ。今回の練習ラウンドも本番1週間前に1度だけ。この間、クラブは全く握らなかったそうだ。「コースのメモはちゃんとつけました。高校、大学の蓄積があります。（技の）引き出しは持っていると思います」と胸を張る。

ゴルフに遅れて、中学からはバスケットを始め、現在でも北九州リーグの「門司クラブ」というチームに所属し、年間20試合ほど戦う。「ゴルフよりバスケ

の方が好き」とはっきりしているが、そのバスケットのお陰で下半身が強くなり、300ヤードの飛距離につながっている。仕事（社長業）、バスケット、そしてゴルフ。「ミッドアマに出る人たちは、みんな仕事をしているし、独特の雰囲気があります。会話でも会社とか社長の考えとかも学べます」と大会出場の意義を胸に刻んでいる。

◆2位・工藤亜沙希（2度目の出場。最終日の1番の第1打で左OBの7）「出だしのトリプルが響いた。昨日（初日）はティーショットが右に行ったし、雨で滑りそうでね。後半は（パープレーの36で）粘ったけど。もっと空君をドキドキさせないといけなかった。空君のショットに勝てなかったけど、初の最終組は面白かった」

◆3位・江口信二（最終日は3バーディー、4ボギー、1ダブルボギーの75。昨年は初日トップタイも最終日に最終組で崩れる）「今年は最終組の1組前で伸び伸びやれた。プレッシャーのかかり方が全然違う。去年の経験があったから耐えることができた。優勝はしたかったけど、空君が強かった」



写真は大会が開かれた玉名CCの9番ミドル（451ヤード）。ティーグラウンドから見ると、左ドッグレッグしており、コーナーのところが今年7月の豪雨で崩れ、現在工事中。今大会、ネットで囲んだ修理区域はOBゾーンとして競技

を行ったため、難易度が急激に上がった。この区域を第1打で越すには280ヤードのキャリーが必要で、ほとんどのプレーヤーが手前に刻んだ。ちなみに、このホールは2日間ともバーディーが1人も出らず、アベレージは初日が5・19、5・20だった。



2位の工藤亜沙希



3位の江口信二



距離があって広々とした練習場